コロナ禍で変化したStartupのトレンド

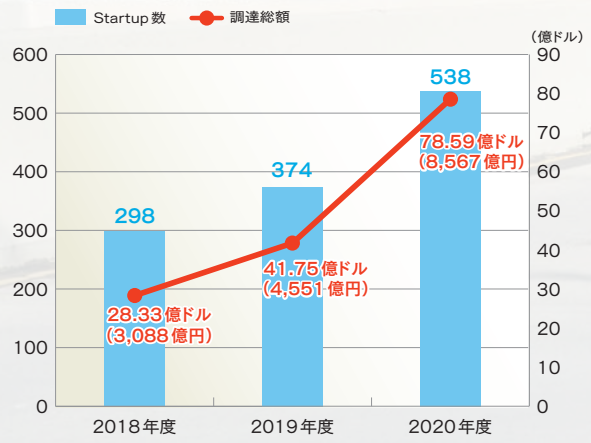
2020年3月以降、世界中の多くの人が日常生活や仕事で新型コロナウイルス感染症の影響を受けています。シリコンバレー地域での投資やStartupの活動はどうなっているのでしょうか。

INTEC Innovative Technologies USA, Inc.
Director, Chief Operating Officer
坂田繁明

コロナ禍での投資とStartupの動き

まずは下のグラフで、カリフォルニア州に本社があり、Series Aラウンドを調達したStartup数と総調達額の推移を見てみましょう（Startupは資金調達の規模に応じてPre-seed、Seed、Series A、Series B、Series C……という成長段階〈ラウンド〉に分類されます。Series Aは資金調達額平均1,050万ドルの初期段階）。

カリフォルニア州に本社があり、Series Aラウンドを調達したStartup数と総調達額の推移



Startup調査ツール「CrunchBase」のデータを用いてIITが集計。各年度は4/1～翌年3/31の期間。Series A、B、C以降の全Startupのうち、Series Aが5割程度を占めている

2020年度は、当初こそ新型コロナウイルス感染症の拡大もあり、シリコンバレーも厳しくなるのではと懸念しましたが、年間を通じて投資もStartupの活動も大きく落ち込んでいないという感覚がありました。実際、数字を見てみると大きな右肩上がりとなっていて少し驚いています。ピンチの時ほどエコシステムが有効に機能して底力を見せるのかもしれません。

まだ始まったばかりなのでグラフには入れていませんが、2021年度は4～5月ですでに111社がSeries Aラウンドを調達しています（5/24現在）。その資金調達総額は約22.6億ドルと、わずか2カ月弱で2018年度の73%超に達しているのです。実は5/19にもデータを取ったのですが、その時は100社で17.9億ドルでした。カリフォルニア州だけでも、たった数日で11社がSeries Aラウンドの資金を調達し、2億ドルほどのおカネが動いたことになります。

この厳しい時期に資金調達して世に出たStartupが、数年後に大きくなっているのかもしれませんね。

トレンドの変化と金鉱の探索

2018年度と2019年度にSeries Aを調達したStartupの調達額上位50社は「ヘルスケア・バイオ」と「AI・データ分析」の2分野が拮抗していたのですが、2020年度は

カリフォルニア州に本社があり、Series Aラウンドを調達したStartup調達額上位50社の分野別一覧

	ヘルスケア・バイオ	AI・データ分析	Fintech	eコマース	情報技術	Edtech	メディア／エンターテイメント／AR・VR	プラットフォーム	セキュリティ	その他＊
2018年度	8	6	4	6	7	2	5	2	2	8
2019年度	12	10	6	1	2	1	2	4		12
2020年度	25	5	8	2	1		4	1		4
2021年度	14	6	5	5	5	1	2	3	1	8

Startup調査ツール「CrunchBase」のデータを用いてIITが業種分類。各年度は4/1～翌年3/31の期間、ただし2021年度は4/1～5/24
＊「その他」には、自動運転、航空機、農業、脱・低炭素、データ統合などが含まれる

「ヘルスケア・バイオ」が25社、「AI・データ分析」が5社と大きく差がつきました。

また、2021年度4～5月でSeries Aを調達した111社のうち、調達額上位50社は、「ヘルスケア・バイオ」14社、「AI・データ分析」6社、「Fintech」5社、「eコマース」5社となっています。2020年度以降、コロナ禍によって「ヘルスケア・バイオ」に期待が集まり、ステイホームを支援するeコマースの分野でも資金が集めやすくなったと考えてよいでしょう。

ところで皆さんは「49ers（フォーティーナイナーズ）」をご存じでしょうか。アメフトチームの名前の由来にもなっていますが、もともとは1849年のゴールドラッシュでカリフォルニアに金を掘りに来た人たちのことです。私は21世紀の49ersになったつもりでトレンド（大金脈）を追うと同時に、純度の高い金（人が追っていない金脈）を追うことも大切だと考えています。それでは、このコロナ禍でトレンドとは少し離れた分野で資金を集めた特色あるStartupはいるのでしょうか。

調べてみると、「データ統合」「情報技術」の分野にいくつかこれと思しきStartupがありました。これらのStartupは、最先端の何かを持っているか、長期的な社会課題に挑戦しているのかもしれません。このような視点でStartupをピックアップしてその動向に注目するのも、IITの役割の1つです。

ペインポイントを起点としたサービス創出

iPhoneをお使いの方は多いと思いますが、皆さんはどの機種をお持ちでしょうか。

私はこの春にiPhone12を持つまで、iPhone 6Sを5年間使っていたため、ホームボタンがなくなったことに慣れるまでいささか苦労しました。ここで思い出したのが、高齢になった私の両親です。私がアメリカに赴任する際、スマホに連絡手段のアプリをインストールして渡しましたが、何回練習しても物理的なボタンと同様にアイコンをギュっと押してしまい、スライドさせて通話状態にできないのです。スマホをスライド操作できない両親と、ホームボタンの消失に慣れない私のペインポイント（抱えている課題）は、ハードウェアの進歩についていけないという点で同じでした。

インテックが取り組んでいる長期課題に、金融包摂があります。これは、誰もが金融サービスの恩恵を受けられるようにするというものです。2016年、私はFintechが、①国をまたいで（globalization）→②どこにいても（web/mobile）→③体を動かせば（wearable）／呼び出せば（Voice/VR）→④考えたら（感情認識）→⑤何もせずに（脳波を識別し、特定個人になりきって動作するAI）の5段階で進むとレポートしました。今はweb/mobileのサービスが中心となっています。しかし日本における金融包摂の本質的な課題の1つは、ハードウェアやソフトウェアの進歩についていけない人たちをどう救うかということなのかもしれません。

IITでは、49ersの1人としてトレンドをウォッチするとともに、ペインポイントを起点としたサービスを創出し、社会に貢献していきたいと考えています。